

タンジョンに  
出会いを求めるのは  
間違ってるだろ  
うか

2

大森 藤ノ  
OMORI FUJINO  
イラスト ヤスダスズヒト  
YASUDA SUZUHITO



試し読み版



# ■プロlogue 弱者の嘲笑

イラスト・デザイン  
ヤスマズヒト

サポーター。ダンジョンの探索時における非戦闘員。

主に魔石やドロップアイテムといった戦利品を回収し、地上に無事運び届けることが役目。前線でモンスターと戦うパーティに負担をかけぬよう、バックアップの全般を担う裏方役。詰まるところ、サポーターとは、荷物持ちだ。

「おい、何してやがる！ とつととしろ！」

「今日もまた罵声が飛ぶ。

「ふく 膨れに膨れた大荷物を背負い、僅かに遅れた足取りを、冒險者である男は唾棄するように責めた。

「燐光を灯し光源だけは困らない迷宮の中。

『蔑みを隠さないその声が、酷く反響していく。』

「荷物を運ぶくらいでちんたらしやがって、能無しが！」

『ただの荷物持ちと非難する、これまで耳にたこができるほど聞いてきた、代わり映えしないその文句。』

『傲慢な言葉は時に横暴な暴力にも変わる。常に上の立場にいる彼等は下敷きにされる者に痛痒など覚えない。』

冒險者はサポーターを顧みない。

ましてや、専門職のサポーターなど嘲弄の対象でしかありえない。

彼等は弱者にどこまでも残酷になれる。

金も、尊嚴も、希望も、全てを奪つていけるのだ。

次のような言葉をどこかで聞いたことがある。

曰く、良きサポーターに恵まれなければ冒險者は真価を發揮できない。

曰く、彼等は縁の下の力持ちである。

随分と取り繕つた綺麗な言葉だが、なるほどとも頷ける。確かに道理だろう。一理ある。

サポーターの存在が冒險者の負担を軽くする一役を買つている。これは否定できない。

『碌に仕事もこなせねえ足手纏いに、くれてやる報酬なんざねえぞ！』

だが、そのことを一抹でも理解してくれる冒險者が、どれほどいるのだろうか。

サポーターのありがたみを認識してくれるような殊勝な冒險者が、一体どこにいるのだろうか。

専門職であるサポーターに、目の前のような侮蔑を向けない、そんな奇特な者が、果たして存在するのだろうか。

「いいか、モンスターに囮まれた時くらいはしつかり仕事をしろよ——役立たず？」

『いざとなればモンスターの囮にちようどいい。』

堂々とそんなことを口にする冒險者様を見て、笑いが漏れてしまつた。

〔サポーター〕



なるほど、なるほど。  
本当に、見限るのに困らない奴等だ。  
かたがただ。  
冒險者というものは。

じり、じり、と土を囁む音が鳴る。

天井から燐光の光が落ちてきて、四方八方を薄緑色の壁に囲まれた辺り一帯を照らし出す。『ルーム』と呼ばれている、ダンジョン内で正方形に開けた空間だ。

僕はその中で逆手に持った『神様のナイフ』をソイツに向けていた。

四本の足に一本の細い腕、大きな双眼。赤一色に染まっているその姿は蟻を連想させる。普通の蟻と異なるのは、体が僕と同じくらい巨大なことと、そのくびれた腰を起点にして上半身がもたげるよう起き上がりついているということ。

『キラーアント』。

7階層になつて初めて姿を現すモンスター。冒險者の間では6階層の『ウォーシャドウ』と並んで『新米殺し』と呼ばれているらしい。

その名前の謂れば身に纏つた頑丈な硬殻と、ゴブリンのような低級モンスターとは比べ物にならない攻撃力。体の表面を覆つている外皮はまるで鎧のよう硬い。半端な攻撃は弾かれてしまい、そうでなくともあの殻の上から肉体に直接ダメージを与えるのは大変手こずる。

腕先には発達した四本の鉤爪。湾曲した歪な突起は不気味な光沢を今もちらつかせている。

防御を攻め崩せない間に鋭い爪で致命傷をもらつ。これがキラーアントにやられるパターン。

これまでとは明らかに勝手が異なるモンスター故に、5階層までの敵に慣れ切つた冒險者達はことごとく奴等の餌食になるのだ。

『ギギツ』

キチキチキチツ、とキラーアントが口をもぐもぐと動かし歯を鳴らしている。

実はこのモンスター、仲間を呼んだりする。叫び出したりはしないけれど、どうやら僕達にはわからないフェロモンみたいなものをピンチに陥ると発散するらしいのだ。

本当に硬殻との相性がいい。僕達冒險者からすれば最悪なんだけど。

とにかく、倒すなら速攻。最良のは一撃で完全に息の根を止めることだ。

数歩の間合いを置いて、僕とキラーアントは睨み合う。

「——ふつ！」

動いたのは僕。反撃とか後攻とか、そういうのは性に合わない。

こちらから仕掛け、肉薄、吠声とともに右腕を振りかぶつてくるキラーアントへ突っ込む。

宙に白い弧を描いた敵の四本の鉤爪が、視界の左側から迫り——切断。

僕の方が一瞬速い。キラーアントを上回る攻撃速度で、その鉤爪を前腕から斬り裂いた。

『ギツ！』

右腕——武器の無くなつたキラーアントの右側面へ回り込み、その痛みの呻き声を耳にしながら、僕は『神様のナイフ』を次の瞬間のために溜める。

キラーアントを上手く倒すには、硬殻の隙間を狙い、奥の柔らかい肉を攻撃するのが常套手段。

狭い殻の間を突くのは駆け出しの冒險者には難しいけど、少なくともそれがセオリー。

だけど、僕はあえてそれを無視した。

腕がなくなつて無防備な半身を晒すキラーアントの首めがけ、漆黒の刃を真一文字に難いだ。

〔〕

首を守る硬殻こと刃が沈み込んでいく感覚。

感触は最初だけ。後は大した抵抗もなく刃は滑り込み、僕はいつもそつするように自然体で腕を振り切つた。

サンツ、と小気味いい音とともにナイフが流れ出て、そしてキラーアントの首は宙を飛ぶ。

首の断面から滴る紫色の体液。上空を雜揉みするモンスターの頭部は、何が起こつたのかわからない、そんな眼を浮かべながらやがて地面に墜落する。

間を置かず、首を失つた体が思い出したように脱力し、地面に崩れ落ちた。

「……うん、いい！」

刀身を振るつて付着した体液を飛ばしながら、僕は『神様のナイフ』を見た。

手の平に吸い付く感覺。まるでずっと一緒に居たかのように、僕の手に馴染んでいる。

威力も申し分なし。あのキラーアントの硬殻をバターのように切り裂いてしまつた。

すごい、これがヘファイストスの武器!!

神様が、僕のために贈つてくれたもの！

「♪♪」

新しい玩具をもらった子供のように浮かれながら、葬ったモンスターの魔石回収作業を行う。

実際、今の僕は子供と大して変わらないだろ。年一回の誕生日に祖父から英雄達の絵本をもらつた、あの時の気持ちと似ている。当時はずっと大切に読もうといつも思つていて、最初の内は触れて汚れるのが怖かつたくらい。

魔石に今は使うのがもつたいないなんて言わないけど、心が浮かれ立つのは止められない。

(ありがとう、神様……)

最近何だかとても忙しそうにしている神様の顔を思い浮かべながら、僕は感謝の思いを笑みと一緒に滲ませた。

絶対強くなる。この武器の相応の持ち主になるように、神様の思いを蔑ろにしないために。腰に差した鞘にナイフをしまい、僕は7階層の探索を続けた。

「ななあかあいそお～？」

「は、はひつ!?」

ベルは悲鳴を上げた。胡散臭げな声とは裏腹に、目の前で眉根を寄り合せるエイナから怒気の気配をぶんぶんと感じ取つたからだ。

（どうき）

本日7階層の探索を終えたベルは、ヘスティアから贈られたナイフの存在もあって先程上機嫌にギルド本部へ凱旋した。戦利品を換金し終えた後、己のアドバイザーであるエイナのもとへ顔を出すがてら、近況報告をと意気揚々に足を運んだのだが――到達階層を7階層まで増やしたと彼女に話した瞬間、ベルの絶頂期は終わりを迎えたのだった。

「キミはっ！ 私の言ったこと全然わかつてないじゃないよ！」  
「うかうか、汚闊にもほどがあるよ！」

「…………」

「ダンツ！」とエイナは机に両手を叩きつける。彼女の斜に構えられた緑玉色の瞳に射竦められ、ベルは蛇に睨まれた蛙状態だった。

エイナが怒っているのは言葉の通り、ベルが身の程もわきまえず到達階層をホイホイと増やしたことにある。彼女の持論でいうのなら、『冒險』を冒したこと、それを責めているのだ。

「二週間とちょっと前、ミノタウロスに殺されかけたのは一体誰だったかな？」

「ぼ、僕ですか？」

「じゃあ何でキミは下層に降りる真似<sup>まね</sup>してるの！ 痛い目に遭<sup>あ</sup>つてもわからないのかな、ベル君は！」

「す、すいませえん……！」とベルは涙目になるが、エイナにしてみれば本当に思いやつての叱りつけだ。ベルに死んでもらいたくない一心で身も心も鬼のようにして吠えている。

けが違う、一人ならあつという間にあの蟻のモンスター達に食い散らされてしまうだろう。

「キミは危機感が足りない！ 絶対に足りない！ 今日はその心構えの矯正<sup>きょうせい</sup>に加えて、徹底的にダンジョンの恐ろしさを叩き込んであげる!!」  
ひいつ、とベルは情けない声を出した。  
エイナの指導のスバルタぶりはこの半月の間で体の奥にまで植え付けられているからだ。

彼女の教えは間違いなく彼にとつて実利として現れているが、しかしその特訓まがいの教授を、ハイ任せテクダサイと快諾<sup>かいだく</sup>できるかはまた別問題。ベルは慌てながら弁明<sup>べんめい</sup>に走る。

「ま、待つてくださいっ！ そのつ、僕つ、あれから結構成長したんですよエイナさん！」  
「アビリティ評価日<sup>ひつき</sup>がやつとのくせに、成長だなんて言うのはどこの口かな……！」  
「ほ、本当です！ 僕の【ステータス】、アビリティがいくつかEまで上がったんです！」  
「……E？」

ぴたり、とエイナは動きを止めた。きょとんと目を丸くさせる。

ベルの咄嗟<sup>とっさ</sup>の発言が何を言っているのかわからず、理解したところで、すぐに信用していない表情を浮かべる。

「そ、そんな出でまかせ言つたって、騙されるわけ……」

「本当です本当なんです！なんかこのごろ伸び盛りっていうか、とにかく熟練度の上がり方がすごいんです！」

「……本当に？」

ふんぶんぶん、と勢いよく頷くベルの姿に、エイナは戸惑った顔をした。

ベルの担当アドバイザーになつてまだ日は浅いが、目の前の少年が嘘をつく時とそうでない時はなんとなしにはわかるからだ。

エイナの洞察によれば、今ベルは嘘を言つていない。

「……本当に、E？」

「は、はい？」

ちょっと待つて、とエイナはベルに手の平を向ける。

残っている手でS、A、B、C、D、E……と指を六回分折つたところで、「むむむっ」と声をこぼす。もう一度。S、A、B、C、D、E……六回。結果は変わらない。

エイナも混乱していた。ベルは嘘を言つていない、言つていないが、基本アビリティがEまで上り詰めたという法螺話などとも信じられないのだ。

エイナが口にしたアビリティ評価Hという予測は、何も当てずっぽうに言つたものではない。半月という時間幅で冒險者が達することのできる妥当な能力ラインが、得意不得意な分野関係の前の少年は元農民だ。しかし、ベルは嘘をついていないときてる。

「むむむむっ」と難しい顔を継続するエイナは人差し指をその細い額に当て考え込む。生憎目の前の少年は元農民だ。しかし、贝尔は嘘をついていないときてる。

一人沈黙に取り残されるベルは、若干居心地が悪そうに身じろぎをした。

「……ねえ、ベル君」

「は、はい？」

「キミの背中に刻まれてる【ステイタス】、私にも見せてくれないかな？」

「……えつ!?」

至つて真面目な顔をしてそんなことを言つてくるエイナに、ベルは声を高くはね上げた。

「あつ、キミの言つていることを信じていいわけじゃないんだよ？ ただ……」

エイナは慌てながらぱたぱたと両手を振つて誤解を解く。

そう、ただ……ベルの主神であるヘスティアが、彼に間違つた情報を与えているのも無きにしも非ずではないか……と彼女は考えていた。

もしくは、情報伝達の間で何らかの齟齬があつたのではないのか、と。そんな風に疑つてしまつだけ、Eという記号はエイナにとつて非常識な代物だったのだ。

それこそ動かぬ証拠を提示してもらわなければ、ベルの言葉を信用することはできない。

「で、でも、冒險者の【ステイタス】って、一番バラしちゃいけないことですよね……」

都市の冒險者を管轄<sup>かんかつ</sup>下に置くギルドの中でも個人情報の漏洩<sup>ろうえい</sup>は法度<sup>ほうど</sup>だ。L.V.などは各個人のランク付けや各派閥の強さの指標として報告の義務があるが、後はその限りではない。中には稀少な【スキル】や特殊な【魔法】を持つている者もいる。【アミリア】という組織の中には、容易<sup>やす</sup>く今日の友が明日の敵になる現今<sup>げんだん</sup>、弱点等<sup>とう</sup>を晒さないためにも情報の黙秘<sup>もくひ</sup>は行われて然るべきだ。

「今から見るものを私は誰にも話さないと約束する。もしベル君の【ステイタス】が明るみになることがあれば、私は相応の責任を負うから。キミに絶対服従<sup>ちか</sup>を誓うよ」

「ふ、服従<sup>ちか</sup>つて……そ、そもそも、エイナさん【神聖文字】<sup>じゆごくごじ</sup>読めるんですか?」

「うん、ちょっとだけだけど。【ステイタス】のアビリティくらいは読み取れると思う」

「これでもエイナは学区<sup>がくく</sup>に通い、総合神学<sup>そうごうしんがく</sup>を専攻<sup>せんこう</sup>していた秀才だ。

簡単な【神聖文字】なら読み書きできる。

「ダメー、つて言うよ?」

「そ、それは確かに、勘弁してほしいです……」

「魔法やスキルのスロットの方は見ないから、ね? お願いつ!」

「この目で確認させてもらえなかつたら、私、今まで経つてもベル君に5階層より先に行つちゃダメー、つて言うよ?」

「魔法やスキルのスロットの方は見ないから、ね? お願いつ!」

「別に僕はスキルも魔法も発現<sup>はつげん</sup>していないですから、それはいいんですけど……わかりました」

両手をぱんっと鳴らして頭を下げるエイナにベルは折れた。

今まで散々世話をなってきたことに加え、彼女にはヘステイアと同じように絶対の信頼を寄せている。ベルはエイナの言葉を疑つ気にすらならなかつた。

「えっと、じゃあ……脱ぎますよ?」

「顔を赤くするくらいなら一々確認しないつ! 私の方も恥ずかしくなつちやうよ!」

お互い頬を染めながら席を立ち、空間のゆとりがある部屋の隅に向かう。ベルは気恥ずかしさを呑み込んでさつさと上半身裸になつた。

背中を埋めつくす黒刻の【ステイタス】より先に、意外に鍛えられている上半身に少しの間見とれてしまつたエイナだったが、すぐにはつとして顔を左右に振る。ほつそりと尖つた耳を赤くしながら、じつと【神聖文字】の解説に入った。

ベル・クラネル

L.V. 1

力:E403 耐久:H199 器用:E412 敏捷:D521 魔力:I0

(うそ……)

半ばその可能性は受け入れていたものの、いざこうして突き付けられると呆然<sup>ぼうぜん</sup>としてしまつ。

『魔力』は除いたとしても、階層クラスのモンスターなら単独でも十分遅れを取らない能力内容<sup>内容</sup>で防御<sup>ステータス</sup>を重視するエイナからすると『耐久』の低さには小言を挟みたくなるが、それでもベルの戦闘方法はアビリティ傾向から見ても撃乱回避を主眼に置いた一撃離脱<sup>ヒヤンドロ</sup>、許容範囲内だろう。

また、『敏捷』がDへ突入しているのを見て、噴き出しそうになつてしまつた。

(信じられない……)

エイナは静かに喉を鳴らした。自分の常識があつさり壊れていく音が耳の奥で響き、ややもすると薄寒い冷気が背筋を撫でていく。職業柄、ダンジョンにもぐる冒險者の様々な情報を精通するエイナだからこそ、目の前の光景がどれだけ逸脱<sup>逸脱</sup>しているかよくわかる。

ベルの『成長』は、あまりにも度を越えていた。

（……スキル？）

一瞬脳裏を過つたのが、その可能性。

能力の開花がこの型破りな成長力として発現したのでは、とエイナは懊惱<sup>おうの</sup>に近い思考をしばらく働かせていたが……そこでふと、一つの魔が差してしまつ。

（……ちょっとだけなら）

背中の中頃辺りへと続いている【神聖文字】に目が奪われる。その先にあるのは、『魔法』と『スキル』のスロットだ。

（……あ、駄目だ）

ここまで来てしまつと、この抗いがたい衝動に逆らうのは不可能に近かつた。蓋<sup>ふた</sup>が開け放しの宝箱の中身をついつい覗こうしてしまつのは、もはや亞人<sup>ヒューマン</sup>の性<sup>さま</sup>なのか。好奇心が疼き<sup>うずき</sup>、エイナはちらりと魔法とスキルのスロットを確認してしまつ。

（……あ、駄目だ）

読めない。

高度な【神聖文字】の羅列<sup>られつ</sup>によつて、エイナでは魔法とスキルの欄<sup>らん</sup>が解説できなかつた。

——実は、親馬鹿であるヘスティアが万が一に備えて、ベルの能力に影響<sup>影響</sup>を与えない範囲で【神聖文字】に細工をし、【ステータス】にブローテクトをかけていたのだ。【神聖文字】の体系と真髓<sup>しんすい</sup>を把握し切つていないエイナには、その嫌に複雑で奇怪な刻印の構成がヘスティア独自の書跡<sup>しょじ</sup>つまりは彼女の書き方の癖<sup>くせ</sup>だという風に映つてしまい、勘違<sup>かんちゆう</sup>してしまつ。

ベルの実態をめぐる駆け引きは、今回はヘスティアに軍配が上がつた。

「あのー、エイナさん……まだですか？」

（……あ、もういいよ！）

ベルの恥ずかしそうな声に、エイナは耳をピクッと揺らして今の状況に気付いた。照れて笑いながら【ステータス】から目を背け、いそいそと着がえ出すベルに内心で「めんね」と呟く。

しかし本當だったのか、とエイナは唸る。

（……あ、もういいよ！）

間違いを起さなければ優にソロでも通用するレベルだ。

——だがそろそろなると、次に巻き起こるのはまた別の懸念だった。

「……」

「な、なんですか？」

着替えを終えたベルのつま先から頭の天辺まで、エイナはくまなく視線をそぞろ。無遠慮にじろじろと見てくるそんなエイナの瞳に、ベルは声を上擦うわざさせた。

別段エイナは、ベルの全身を舐なめるように見ているわけではなかつた。

彼女が見ていたのはベルの体ではなく、その身に付けていた装備品……貧相な、防具だ。

「ベル君」

「は、はい？」

「明日、予定空いてるかな？」

「……へつ？」



あれから一日たつた。

僕はオラリオの北部で、大通りと面するように設けられた半円形の広場に一人立つてゐる。

エイナさんと待ち合わせをしているためだ。

そう、待ち合せ……。

(こ、これって……デート？)

そんなことあるわけないのに、つい思つてしまつ。

昨日エイナさんが持ちかけたのは、僕の防具を一緒に買ひに行かないかというお誘いだつた。僕のダンジョン攻略状況と現在の装備を照らし合させて、今の防具では頼りないと判断をしたらしい。面倒見のいいあの人せわが、僕のためにわざわざ世話を焼いてくれたのだ。

そう、だから、他意なんてない。親切なあの人せうがいの、親切なお節介せつがい……。  
(……なんだけど、傍はたから見たら、もう……)

形式的には、成り立つちやう。

朝十時に広場の銅像前集合とか！ 二人きりとか！

うわー！ うわーつ！

「おーい、ベルくん！」

「！」

そして、とうとうその時がきた。

あの耳をくすぐる可憐かれんな声の持ち主が、視界の中、小走りをして徐々に大きくなつてくる。「おはよう、来るの早いね。なあに、そんなに新しい防具を買うのが楽しみだつたの？」

あつ  
いや  
僕は……！

——エイナさんと一人きりになることを、変に意識していました。  
なんでも、はつきり云ふてられない業は意氣地無／＼なんばらうか。

僕は落ち着かない表情で視線を左右に揺らした。

「まあ、実は私も楽しみにしてたんだよね。ベル君の買い物なんだけどさ、ちょっとわくわくし

ちやうてつ

エイナさんの服装はいつもと装いが異なっていた。普段はギルドの制服でぴしっと決めているけど、今日はレースをあしらった可愛らしい白のブラウスに、丈の短いスカート。ちょっとお洒落で軽い感じ。よくかけているところを目にする眼鏡は、今日は外している。

ギルドの制服姿を見慣れちゃつ  
なんていうんだろ……凄く眩しい。

エイナさんお得意の懸隔の術中に、僕は見事にはまってしまっていた。

「装備品なんて物騒なものを買いにいくのにわくわくするなんて、私おかしいかな？」

そ、そんなことないですつ！  
僕が慌てて否定すると、エイナさんはくすぐりと笑い出した。うわあ、うわあー……。

ギルドの職員の中でも冒險者達の人気が一、二を争うのも頷けてしまつ

ハーフエルフって、どの人もエイナさんみたいなのかな……。

「な、なんですか？」

「私の私服姿を見て、何か言うことはないのかな?」

悪戯好きな子供みたいな瞳で、上目遣い。  
うつあ、ウワア！……。

「……そ、その、すつぐく……いつもより、若々しく見えます」

「こら！ 私はまだ十九だぞおー！」

エイナさんの細くて白い腕が、僕の首の付け根あたりに巻き付く。  
まわる

そのまま脇に抱えられて締めつけられて……ぐいぐいって、僕の頬がエイナさんの胸に……。  
「ほ、謝しー！」

## 試し読み版

# ダンジョンに出会いを求めるのは 間違っているだろうか 2

発 行 2013年2月28日 初版第一刷発行

著 者 大森藤ノ

発行人 新田光敏

発行所 ソフトバンク クリエイティブ株式会社

〒106-0032

東京都港区六本木2-4-5

電話 03-5549-1201

03-5549-1167(編集)

装 丁 ヤスダスズヒト

株式会社ケイズ(大橋勉／彦坂暢章)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、かたくお断りいたします。

定価はカバーに表示しております。

©Fujino Omori

Printed in Japan

GA 文庫



試し読み版はここまで！  
続きは2月15日頃発売の本編にてお楽しみ下さい